



まだ受けていない予防接種はありませんか？

予防接種は、医療行為の一種ですから薬を塗ったり飲んだりすることと同じように副反応などのリスクがあることは事実です。しかし、さまざまな感染症からお子様を守るための有効な手段であり、現在使われているワクチンでは、病気にかかって健康を損なうリスクよりもワクチンのリスクの方が十分に小さいと評価されています。保育所、幼稚園、小学校、習い事やスポーツクラブなど、集団行動が始まると、感染症をうつされるリスクが高まります。集団生活を安心して送るために、未接種のワクチンがないかどうか、確認してみましょう。

●麻疹・風疹混合ワクチン（MR ワクチン）、おたふくかぜワクチン

1歳になったら1回目、小学校入学までに2回目を受けましょう。

●B型肝炎ワクチン

どの年齢の人も3回目までの接種を終了させましょう。

●日本脳炎ワクチン

4歳ころまでに、おおむね3回の接種が終了しているはずです。

●水痘ワクチン

1歳になったら1回目、3歳までに2回目を受けましょう。2回目の接種を忘れていた人が10%ほどいることがわかっています。

●四種混合ワクチン、あるいは5種混合ワクチン

概ね2歳までに4回目を受けましょう。4回目を忘れていた人が15%ほどいるようです。

●三種混合ワクチン

小学校入学前、中学校入学前の子もただだけでなく、新生児の百日咳を予防する目的で妊婦さんにもお勧めします。

接種を受ける年齢によって一部のワクチンは有料の自費接種になりますが、これらのワクチンは、感染症の予防だけでなく、集団生活における感染拡大を防ぐためにも必要です。予防接種を受けることで、お子様自身が病気にかかるリスクを減らすだけでなく、同級生や同居する兄弟など周囲の人々への感染を防ぐ効果もあります。とくに生後3か月未満の乳児がいる家庭は兄弟からの感染は要注意です。

予防接種は、お子様の健康を守るための大切な手段です。未就園、未就学のうちに必要な予防接種をすべて受け、安心して新しい生活を迎えられるように準備を整えましょう。保護者の皆様のご協力が、社会全体の健康維持にもつながります。どうぞ、ご理解とご協力をお願いいたします。

百日咳のおはなし



百日咳は百日咳菌による呼吸器感染症です。非常に感染しやすい細菌で、くしゃみや咳による飛沫や患者との接触で広がります。子どもは母親からの百日咳抗体を受け継いでいないため、ワクチン未接種の乳幼児が感染すると激しい咳による呼吸困難、二次感染にともなう肺炎、無呼吸発作、呼吸停止によっては危険な状態におちいる場合もあります。

潜伏期間 7日～10日

症状

◎カタル期—鼻水や咳の軽い風邪の症状から次第に咳の回数が増えていきます。2週間くらい続き、感染力が強い時期です。

◎痙咳期—コンコンコンと短く激しい連続した咳の後、ヒューという音をともないながら苦しそうに息を吸う特有の咳発作を繰り返します。2～3週間続きます。

<この時期の特徴>

- ・夜間に咳が多い
- ・熱はないかまたは微熱程度
- ・咳込みによる嘔吐
- ・顔面紅潮、点状出血、目の充血
- ・鼻血
- ・チアノーゼ

◎回復期—次第に咳症状が治まりますが、百日咳の毒素は症状が良くなってもしばらく体内に残るため、完全に回復するには2～3週間かかる場合があります。治療しない場合、咳が治まるまでには通常2～3ヶ月ほどかかるといわれています。

予防 予防接種

予防接種法により現在は5種混合の中に百日咳ワクチンが含まれています。(年齢によっては4種混合、3種混合で受けている場合があります)生後2ヶ月から接種でき、全部で4回接種します。通常1歳半～2歳くらいで4回接種が終わり、その後の追加接種はありません。ただ、ワクチンの効果は一生ではなく5年～6年後には低くなるというデータもあります。学童期で百日咳が流行した年もあったため、崎山小児科では年長児やDTⅡ期(11歳～12歳)の方にDPTワクチン(ジフテリア・百日咳・破傷風)の接種をお勧めしています。

最近、百日咳の患者さんが増えてきているという報告もあるようです。お勤め年齢以外の方でも接種は可能ですので、接種についてのご相談、疑問や不安なことがあればお気軽におたずね下さい。

HPV ワクチンキャッチアップの方の接種期間が延長となりました。詳しくは市のホームページもしくは当院へおたずね下さい。